

---

# ラブカクテルス その2 6

風 雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その26

### 【Nコード】

N0966D

### 【作者名】

風 雷人

### 【あらすじ】

今宵は珍しい味のカクテルをご用意しました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は珍味でございます。

ごゆっくりどうぞ。

あっしは鍋屋でやんす。

町じゃ、五本の指に入る老舗の鍋屋でやんす。

今夜は少し飲み過ぎたでやんす。ウィック。

さっきまで鍋屋の全国鍋屋商工協会の会合に出向いていたでやんす。

冬は鍋の季節。

そして全国鍋屋選手権の季節でやんす。

あちきらの地区は、このところ三年連続最下位でやんした。

そこで組合長が今年こそは、ってんで鍋が、いや、話しが長くなっちまったんでやんす。

しかし、毎年同じ顔が揃っているわけでやんすからなかなか名案なんて出てくる訳なんかないでやんすのに、皆さん酒と鍋に熱くなつて、いやいや、今年こそはどうするかと熱くなってでやんすね、こんなに遅くなってしまうたんでやんす。

ウィック。

しかし、夜道は真つ暗闇でやんす。

いくら酔っ払っているったって薄きみ悪いでやんすな。

その時、後ろから冷たい風が突然強く吹いてきたんでやんす。

あつしは思わずびびっちまったんでやんすが、その途端提灯の灯がパツと消えちまったんでやんす。

あつしは慌てて灯打ち石を出そうとしたんでやんすが、本当に真つ暗になっちまいやんして、そこで困っていたら後ろから灯を差し出されたんでやんす。

これは有難いと、礼を言つて振り返つて見るつていうと、そこには誰もいないでやんした。

でも灯り火が。

でもつてその火ときたら青白い。

あつしの背中では途端にぞーとしたんでやんす。

その青白い火はゆらゆらと浮かんでるんでやんす。

まさかつ！

あつしは悲鳴をあげて走り出したんでやんすが、真つ暗な中、先なんて見えやしやせん。

でも夢中で走りやんした。その時、何かに激突したんでやんす。するつていうと、痛いっていう声が聞こえたもんで、申し訳ないつて謝ったんでやんすが、その声の主が真つ暗で見えなかつたもんで、とりあえず後ろからヒトダマが追つて来てるかと、その人の背中に回り込むと、何やらその人つていうのがヤケにでかいんで、暗闇に目が慣れるのを待つてよくよく見てみると、それには二本の角と、大きい目玉が顔の真ん中に一つ。

あつしは、あまりの出来事に腰を抜かしちゃいました。

悲鳴も出ないくらい怯えていると、その妖怪はヒョイツとあつしを摘み上げて、うまそうだから、なんて言いながら、大きく開けた口の上に運んいくんでやんす。

あっしはたまらず、何とか声を出して言っ たんでやんす。  
待ったっ！

するって言うと、その妖怪は手を止めて、モソモソとあっしに言っ  
たんでやんす。

腹減ったからお前さんうまそうだから食べるから。

あっしは必死で、自分なんぞは旨くなんてないでやんすって言っ た  
でやんす。

それを聞いた妖怪は少しあっしをジロジロ大きな目玉で見始めたん  
で、あっしは何とかして逃げなきゃって思っ て、言っ たんでやんす。  
あっしなんて鍋のダシにもなりやしないっ て。

するっていうと、その妖怪は、あっしに鍋っ てなんだっ て聞いてき  
たんでやんすよ。

この鍋屋のあっしに向かっ てでやんす。

あっしは頭にきて、鍋も知らないであっしを食おっ てやからがある  
かっ て言っ ちまいましたが、あっしもこうなっ たら引っ 込みがつか  
なくなっ ちまっ て、勢いに任せちまっ たんでやんす。

鍋っ てもんはこの世の中で、万人皆が楽しく温かくそっ して、美味し  
く食べれる料理でやんすよっ 。

大きな器に好きな具や、季節の具やらあまり物なんかでも入れ込ん  
で、味噌でもダシでも醤油でも、はたまたお湯だけだっ て構いやせ  
んから、一緒に煮立てて頃合い計っ て頂くでやんす。

その大きな器が鍋っ て言っ んでやんすよ、このトウヘンボク！

その妖怪は、あっしの切っ たタンカに拍子抜けしたらしく、少した  
じろいだんでやんす。しかし、妖怪はあっしを小脇に抱えて、ノッ  
シノッシと歩き始めたんで、あっしは足をバタバタさせてみたんで  
やんすが、やはり逃げることは出来なかつ たんでやんした。

あっしは結局、薄気味悪い洞穴へ連れて来られたんでやんす。

あっしはあまりにバタバタ暴れたもんで疲れちまっ たんでやんす。

ここが年貢の収め時だと思いやんした。

かなり奥の方で妖怪はあつしを小脇から降ろしたんでやんす。

あつしは煮るなりなんなり勝手にしろと、大の字になりやんした。

すると妖怪はそれはそれは大きな、なんと鍋を出してきたんでやんす。

あつしは思つたでやんす。

さっきの話で妖怪めは、あつしを鍋物にするつもりだと。

あつしは、鍋屋が鍋で食われるなんて本望だと思いやんした。

そしてこれが最後と思つた途端、涙が出そうになりやんしたが、あつしは堪えて言つたんでやんす。

好きに煮やがれてんだい。

そしたら妖怪の奴は、あつしに向かってこう言つたんでやんす。

鍋あるから食べたいから作れないから。

何だ？この妖怪は何を言ってるんでやんしょ？

ははあーん、この妖怪はさっきのあつしの話を聞いて、鍋をつつきたくなつたんでやんすね。

あつしは寝そべっていた体を起こして、とりあえず鍋を覗きにいつてみたんでやんす。

それはそれは大きな鍋でやんした。

あつしが見た中じゃ一番でやんしょ。

きつと百人分くらいはいっぺんにできちまいそうな鍋でやんした。

あつしは考えたでやんす。こんなに大きな鍋で鍋物をやれるなんて鍋屋の冥利に尽きるつてもんだ。

あつしはその妖怪に、ここにある食べ物を全部出すように言つたんでやんす。

妖怪は意外に素直に頷くと、両腕一杯に食べものをあつしの目の前に持って来たんでやんす。

あつしは腕を捲り、鍋を作り始めたでやんす。

食材は、見たことのないキノコに、見たことのない根っこ、見たこ

とのない魚に、見たことのない動物の肉、それに見たことのない調味料。

あっしは恐る恐る少し舌に載せては確かめたでやんす。  
すると、どれをとつても、今まで口にすることがない味と、香りに驚いたでやんす。

あっしは興奮したでやんす。

頭の中で味の組み合わせを考えて、スープを整えて、そしてきれいな盛り付けをしていよいよ鍋に火を掛けてみたでやんす。鍋はグツグツを音を立て始めると、いい香りで辺り一面を覆い尽くし、その香りに妖怪ときたら手を出そうとしてきたでやんすが、あっしは何回もその手を叩いたでやんした。

さてさて、そろそろ食べ頃でやんす。

あっしは最後に、うちの店の隠し味を入れたでやんす。

これは酒でやんす。

竹筒に入っていた酒を惜し気もなく鍋に注ぐと、何とも言えない香りが。

妖怪を見ると、奴の顔はもうとろけていたでやんした。

ヨダレを垂らして、あっしの方をうらめしそうに見ていたでやんした。

あっしは頷いて、目で鍋をツツくことを許すと、妖怪は凄い勢いで熱い鍋を抱えて食べ始めたでやんした。

美味しいから、これ美味しいから。

そりやそうでやんしょ。なにせ、あっしが作った鍋でやんすから。

妖怪はそのうち、鍋一つペロつと食べ尽くすと、今度はうとうとと寝始めたのでやんした。

シメシメ。あっしはここから逃げ出したことにしたんでやんす。しかしながら、少しだけ気がかりなことがあったんでやんす。

それというのも、実はあまりにも、妖怪の体が美味そうに見えていたんでやんす。

そう、何かとても艶やかで、透き通っていて、弾力があり、舌触り

がよさそうな。

あつしはついつい、寝ている妖怪の体を摘むと、それがなんと、ポロリと何の抵抗もなく取れたんでやんす。

一口拝借。かぶっ。

なんという歯応え。

コリコリと軟骨と、サザエやアワビの間くらいの丁度いい歯応え。味はしつこい程無くして、ほんのり塩味。

これは鍋には持ってこいでやんす。

あつしは、もう二つ摘み、その妖怪から身を頂いたでやんす。

そうしたら、妖怪はいきなりイタタツと体を起こしたもんだから、あつしは慌てて逃げ出したでやんす。

いやー、しかし危なかった。なんとか逃げ出したでやんすよ。クワバラクワバラ。

あつしは必死になって逃げて走った手に、礼の妖怪の身を持っていたことに気付き、その夜は急いで店に戻ったでやんした。

次の日、あつしは早速組合長の所に出向き、話しの一部始終を語って聞かせ、例の妖怪の身を差し出して、二人で密かにそれを使った鍋をこしらえてみることにしたでやんす。

そして出来上がったその鍋は、たまげる程の絶品でやんした。

あつしと組合長はお互い向き合うと頷き、これで選手権の優勝はいただきだと、ヒソヒソ笑ったのでやんす。

狙い通りに、あつしらの地区は、組合発足以来初の優勝を果たしたのでやんす。

今回は妖怪の身のおかげで、それに合うスープ作りなどを、組合員たちが寝る間も惜しんで努力して取り組み、この味で興奮した全員が今までにないくらい高級な食材なども、協力して集めてきてくれ



た結果でもあつたんでやんした。

組合長を始め、全員がその優勝に歓喜して、その夜の宴会は大盛り上がりでやんした。

噂じゃ、あの鍋物は近々殿様にも献上されることになり、選手権が終わるやいなや、たいそう立派な馬車がその鍋を運んでいたでやんした。

鍋屋冥利に尽きるってもんでやんす。

めでたいめでたい。

ウィック。

いい気分でやんす。

あつしはご機嫌で、夜道を千鳥足で歩いてやんした。

そういや、あの妖怪と会ったのもこんな夜でやんした。

そんな事を思つて歩いていると、いきなり強い風が吹いたと同時に提灯の灯が消えて真っ暗になりやんした。

そして、どこからともなく声がしたでやんす。

美味い鍋食いたいから。

あつしはキタキタと、この間の詫びと礼を言うつもりで周りを見渡し、大きな声で出てくるように言つたでやんす。

すると、何かあつしの体が変な感覚に襲われたでやんす。

はて??

あつしは懷から火付け石を出して提灯に火を入れて自分を照らしたでやんす。

するつていうと、あつしの体は、体はみるみるうちに透明に透き通つて、何とも美味そうになったから、どうなってるかわからないでやんすが、食べ頃だから。

あっしは、こうして妖怪の腹の中に収まったでやんす。

あっしはため息をついて今までの人生を振り返ったでやんす。

あっしは小さくうずくまってしょげていたでやんす。

すると、後ろから誰かが肩を叩いたでやんす。

えっ？と思い、振り返ると、な、なんと組合長！

その後ろに続々と組合員のやつまで。

あっ！選手権の審査員や隣のおばちゃんやおじちゃんや、おとうやお袋、婆さまや爺さまや、あっしの好きな隣町の鰻屋さんの娘さんや、と、殿様までー！

こりやていへんだっ！鍋つくらなきやつ、でやんす！

鍋は大勢でつかなきやでやんすっ！

あっしは妖怪の腹の内側を摘まんでみたんでやんす。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0966d/>

---

ラブカクテルス その26

2011年1月26日04時51分発行